

## 最新イギリス短篇小説集（2）

## —「女王ではなく」—

## New British Short Story Series (2) : "Not the Queen"

恩田 幸治

Koji ONDA

## Abstract

The purpose of this paper is to introduce current trends in contemporary British literature. In the first section, the short story entitled "Not the Queen" by Jackie Kay is translated into Japanese. The short story was originally published in *New Writing 11*, the latest edition of an annual anthology of new works by established and new authors in Britain. In the second section of the paper, the short story is given a critical analysis and review.

## &lt; 序 &gt;

今年4月、イギリスで *New Writing 11* が出版された。*New Writing* という本は、有名、無名さまざまな作家による最新の短篇小説、創作中の長篇小説の抜粋、詩、エッセイなど、イギリスで「新しく書かれたもの」を収録した最新イギリス文学選集で、1992年以來毎年1回出版され、今年で第11巻になる。

1998年以來、筆者は毎年 *New Writing* の最新号から短篇小説を1篇厳選し、『岐阜市立女子短期大学研究紀要』の中で紹介してきたが、今回で5回目になる。

さて、最新の *New Writing 11* には30人の作家の新作が収録されており、そのうち短篇小説が13篇。今回はその中からジャッキー・ケイ (Jackie Kay) という作家の「女王ではなく」("Not the Queen") という短篇小説を取り上げ、翻訳と書評を試みる。13篇の中からこの作品を選んだ理由はいくつかあるが、その1つは、今年2002年がエリザベス2世の即位50周年記念の年であり、「女王ではなく」という作品がそのエリザベス女王にそっくりな女性を主人公としているからである。実にタイムリーな作品であると言えよう。しかしながら、筆者がこの作品に注目したということ自体、作者の——そして *New Writing 11* の編者あるいは出版社の——思う壺なのかもしれない。この点については、作品翻訳の後

の<書評>の中でもう少し詳しく述べる。

作者ジャッキー・ケイについて簡単に紹介しておこう。*New Writing 11* 巻末の著者紹介によると、ジャッキー・ケイは「最新の短篇小説集 *Why Don't You Stop Talking* を Picador 社から出版。最初の長篇小説 *Trumpet* は *Guardian* 紙のフィクション賞を受賞。彼女は詩人で、現在、マンチェスター在住」である。

amazon.co.uk のウェブサイトによると、*Why Don't You Stop Talking* は来年1月の発売予定で、*Trumpet* のほうは1999年に出版。今年9月には *The Straw Girl* という子供向けの小説を上梓したばかりである。また、1991年に詩集 *The Adoption Papers*、1993年に詩集 *Other Lovers*、1998年に詩集 *Off Colour* を発表しているように、もともと詩人として活躍していたようであり、他にも何冊か詩集を出している。

また、*New Writing 11* の中で「マンチェスター在住」と紹介されているが、amazon.co.uk 掲載のある書評によると、ジャッキー・ケイはスコットランド出身の黒人女性で、政治的には左翼で、性的には同性愛者。今回取り上げた「女王ではなく」という短篇小説の主人公もスコットランド在住の女性である。

## &lt; 翻訳 &gt;

## 女王ではなく

ジャッキー・ケイ

こんな目に遭うのは自分が過去に何をしたらなのか説明をつけようとしながらマギー・ロックハートは今まで生きてきた。出来事には理由があるものだ。ただ単に起こるのではない、断じて。その理由が分かるのに時間がかかることもあるが、いざ分かると、それは彼女の年金支給明細書のように明快至極。ほとんどの出来事について、彼女は自分なりに納得のいく形で説明をつけてきた。もっとも、誰も彼女の言うことを真に受けなかったので、その説明に至るまでの論理を人々に理解してもらうのは難しかった。マギーは人にかかわれるのが嫌いで、まだ目鼻立ちが定まらぬ幼い頃でさえ、人にかかわれるのは苦手だった。けれど、マギーの悩みの種を目にしたら、この上なく思いやりに溢れた女性ですら、思わずその場に立ちすくんだであろう。どう考えてみたって楽ではあるまい、その顔を身につけて物笑いの種として生きていくなんて。彼女の顔を見ると、誰でももう1人の人物の顔を思い浮かべた。道行く男の人も女の人も、バス停に立つ赤の他人も、彼女の家族でさえも。そして、彼女自身ですら、鏡にちらっと目をやると、そこに自分ではなくあの忌々しい女王を見ているような妙な気分になった。いや、冗談ではなく。もちろん、濃紺、ピンクからエメラルドグリーンまで全色揃った堅苦しいボタン付きスーツに身を包んでスカーフをしているのでもなければ、ダサイブローチをつけて間抜けな帽子をかぶっているのでもないが、それでもやはりマギーは女王そのものだ。たとえ化粧なしで巻きタバコをくわえていても、マギー・ロックハートは不運にも女王陛下エリザベス2世にそっくりだった。

マギーがその顔を授かったのには、何らかの理由があるはずだった。10代の頃からマギーは女王と共に歳をとってきた。女王はマギーと同じ年で、マギーも女王と同じ年。今や2人とも70代なのに、いまだにその顔の理由は不明。ああ、もうたくさん！ マギーは宗教にのめりこむタイプではなかったが、神には1つの壮大な計画があるものだとぼんやり考えていた。だから、人生にも何らかの意図があるはずだ。でなければ、人生のすべての意味は一体？

20年前、マギーがグラスゴーからエジンバラに向かう途中、高速8号線で車が故障した。英国自動車協会の男がやって来ると、彼女を見て口をあぐりと開けた。

「いやー、あんた、たまげたよ」

男は彼女の車のボンネットを開けて、エンジンを覗き込んだ。

「誰かに言われたことないかい、そっくりだって、ほら……」

「女王にね」

マギーはそっぽを向いて言った。

「まったく」 と彼は言った。

「冗談なんかじゃなく、ちょっと気味が悪いくらいだよ、まったく。修理しとる間、向こう見とってくれんかね。気が散るからさ。いやはや、あんたにやあ面倒なこったろうて。わしが思うに、こんなんがずうっとずうっと続くんだろうよ。たいそうな重荷じゃろうて」

自分の苦勞をちゃんと分かってくれたのは、この自動車協会の男が初めてじゃないだろうかとマギーは思った。硬い路肩に立って彼女が頷いている間、3車線ある高速道路に雨が降りつけ、路面はまるで舞踏室の床のようにびかびか光っていた。涙がちょっと目に浮かんできて頬を伝った。マギーは急いでそれを拭い、丸い鼻の頭を軽く押えた。マギーの考えでは、車が壊れたのには2つの理由があった。1つは、致命的な交通事故から自分を守るため。もう1つは、自動車協会の男に「重荷だろうね」と言ってもらうため。あれから20年経った今でも、事態は昔のままだ。禁欲的な友人は言い放つ。

「でも、持って生まれた顔なんだから」

なるほど、それはまあその通りだとしても、マギーは王室に生まれたのではないのだ。彼女には自分の顔を冗談の種にすることなどできなかった。笑い事じゃない。この顔のせいで人生が台無しになったのだから。自分に対する人々の反応はさまざまだ。切手の顔に似ているという理由だけで自分を友達に選んだ人もいるのではないか。それに、初めは気づかなかったのに、ぎよっとし

## 最新イギリス短篇小説集 (2)

でもう1度見てくる人たち。人違いだと気づくまで、自分をネタに金儲けを狙う人たち。自分の顔がペテンだと想像してみるがいい。自分がいつも人々に勘違いさせている気分を想像してみるがいい。くすくす笑ったり、ひそひそ囁きながら後を付け回す人たち。ジョークのネタにすらされた。その上、ドラムチャペルにある上下階2部屋ずつの小さな自宅までやってきて、家の外に立つ人もいた。

「グラスゴーに住んでる女王そっくりさんのこと聞いたことあるかい？」

他のみんなと同じで、マギーにだって無作法なところはあった。しかし、自分の顔を見ても、そういう自分の個性は見えなかった。想像してみるがいい。自分の考えることが自分の顔と不釣り合いなのだ。自分の顔と中身が一致しないなんてわざわざ考えなくてはいけぬ人が、この世にどれだけいるだろうか。むろん、女王陛下には何の支障もない。エリザベスの人生はいって平穩。彼女は女王なのだ。鏡を覗き込んで、ただそのまま信じればよかった。そういえば、彼女は実際に毎日鏡を覗き込んで、

「私はイングランドの女王です」

と独り言を言っている。でもマギーは、鏡に映った自分の姿を前に、何か言うことでも？ いや、多くはあるまい。もっとも、あの自動車協会の男の宣告以来、実は彼女にも言う台詞はあった。頬紅をちょっと塗り、いっそうあの人そっくりになり、

「何という重荷」

と独り言。そして、とても嫌な目に遭ったりすると、自問した——なぜ私がこんな目に？ 顔って偶然出くわす事故のようなもの？ 顔に何か意味が？

市街のソーキホール通りを歩いていると、自分の顔はみんなの顔よりも重いようにマギーには思えた——肩に重くのしかかってくるみたいだ。買い物をしていると、よく誰かが出し抜けて彼女の顔について何か言ってくる。たとえば、BHSのレジにいた女性は、

「あらまあ、そっくりですねえ。もう、本当にびっくりしましたわ」

と言ってきた。マギーは内気な性格で、特に見知らぬ人と話すのは好きではなく、子供の頃でもそうだった。なのに、その顔のせいで、誰でも何かコメントしてもいいという気になるのだった。知り合いでもないのに唐突に。赤の他人に話し掛けられるには、赤ん坊も犬も連れてくる必要はなく、ただ財布のお札の顔に似ていれば十分だった。失礼だ。みんなすごく失礼だし、どうかしている。

「あなた、女王の双子でグラスゴーに隠れてんでしょ」

10代の若者にしてつくく言われた時、「生意気な小娘」とマギーは心の中で思った。マギーのささやかな満足の一つは、朝から晩まで頭の中で独り言を言うことだった。「なんてデカくて、マヌケで、イヤな奴」——がっしりした大男が彼女に色目を使ってきた時、彼女はそう思った。顔がこんなに似ているのだから、女王も自分みたいに悪態をつくのだろうか、と思うこともあった。握手をしたり、微笑んだり、反吐が出そうなくらい甘ったるいことを口にしながら、実のところ、女王は人々のことをどう思っているのだろうか？

マギーは店内を歩き回った。いつもと同じで、常識のない連中が口をぽかんと開けてみせた。じろじろ。無視しようと彼女は努めた。みんな女王を知っている。みんな女王の顔を知っているのだ。誰も女王に向かって、

「マギー・ロックハートそっくりですね」

とは言うまい。でも、このあいだの夜、まさにそれが起こるといふ素晴らしい夢を見た。しかし現実には、やはりマギーが女王そっくり。その逆ではない。女王がマギー・ロックハートそっくりではないのだ。おそらく、それがマギーを苛立たせる原因だった。自分が自分にとって何者でもないなんて、誰だって耐えられっこないではないか。

ほとんどすべての物事には理由がある。格安旅行券の店が潰れ、チュニジアへの休暇旅行が駄目になった時も、たぶんこれでもかっただわとマギーは納得した。向こうに行ったら、とんでもない災難が待ち受けていただろう。おそらく群衆にもみくちゃにされていただろう。すっかりもみくちゃに。と言うのも、以前キプロス島で飛行機を降りたところ、ものすごい人の群れが彼女を取り囲んだのだ。

「ちがう、ちがう、ちがうのよ、私はあなた方が考えてる人じゃないのよ」

彼女は両手を振って否定し、やっとのこと、夫のチャーリーが群衆を追い払ってくれた。ああ、でもチャーリーは楽しんでたっけ、あのロクデナシ。足をひきずるほど巨体でロクデナシの夫は、彼女がどきまぎして困っているのを眺めて楽しみ、さらに、そんな彼女の腕を取って、まるで2人が有名人であるかのように急ぎ足で逃げては喜んでた。チャーリーにしてみれば心遣いのつもりだろうが、頭に来ることもあった。たとえば、彼が女王の顔の付いたマグカップを買ってロンドンから帰ってきた時、彼女は切れそうになった。

「紅茶を飲みながら自分の妻の顔を拝める奴なんて、そうはいないぜ」

と言って、チャーリーはマグカップを持ち上げてみせた。マギーはそのカップをさっと取り上げると、ガラクタ箱に放り込んだ。

反面、いいこともあった。いつもチャーリーが身の回りの世話をしてくれた。仲良くやるようになってからは特に、彼が掃除機をかけ、狭い裏庭の手入れをし、布団をシーツに入れるのは彼女にはしんどかろうとベッドメイキングもしてくれた。いつもお茶を入れてくれ、湯気の立つマグカップを居間に持ってきてくれて、

「女王様、お茶が入りました」

とふざける。一緒に散歩をすると、チャーリーは彼女の2、3歩後ろを歩き、彼女に近づこうとする奴がいらないか常に警戒していた。

「うちにボディガードがいるといいと思わんか」

と言ってきたこともある。チャーリーはいつもそんな無謀な企みを思いついては喜んでた。しかし、マギー・ロックハートが本当にボディガードが欲しいと思っていたとしても、もちろん2人にはそんなお金はなかった。

職場で給与係をしていたマギーは、来る年も来る年もみんなに散々からかわれて苦しんでいただけに、仕事を辞めてほっとしていた。みんなに給料を手渡す金曜日、

「その顔が好きだっているさ」

と言う連中がいたものだ。この地球上で真っ先に冗談を飛ばすのは自分だと言わんばかりの、思い上がったグラスゴアの男たち。ふん。

「笑顔はなしか？ そんなところも彼女そっくりだな。彼女ほとんど笑わないのに、気づいてたかい？」

とも言われた。その顔にそれほど腹を立てていなかったなら、マギーは女王に対して奇妙な同情を感じるようになっていただろう。

「なんちゅうしかめっ面なの。彼女、スピーチするのにさあ、クリスマスの時くらい本当の笑顔を見せられんのかねえ」

とエドナは言う。エドナは女王の性格についてマギーと語り合うことに喜びを見出しているようだった。エドナ曰く、

「彼女、自分の子供たちに対して少しでも何か感情があるのかねえ？」とか、

「彼女、あのコーギーたちの虜みたいね」

マギーが何と言おうと、どんな目つきをしてみせようと、お構いなし。とにかく女王に関する記事を片っ端から読んで、自信たっぷりにわざわざ発表してくれる。

「女王がダイアナに対して怒り狂ってるわ、怒り狂って」

まるでマギーが気にかけているかのように。マギーにとってはどの情報も大切であるかのように。

「エドナ、退屈で涙出そう。全然興味ないんだってば」

ずっと前には、マギーと結婚する勇気のある男なんていそうになかった。と思っていたら、チャーリーと結婚。そして、初夜の床で、マギーはぞっとする羽目に。

「さあて、この俺だけの女王様はどこかな？」

と彼が囁いてきたのだ。彼女はベッドから跳び出し、2度とそんなことを言わないように彼に誓わせた。でないと、自分はその気がなくなるから、と。でも、チャーリーの小さな目を覗き込んでみると、どう見たって、彼をその気にさせているのは他ならぬ彼女の顔だった。女王の裸を見られる男なんて、そうはいないのだから。

2人はいつだって同い年だった——マーガレット・ドロシー・ロックハートとイングランド女王は。女王が突然年上になってマギーが年下になるなんてことは、ありえなかった。だから、これは一生ついて回るのだ。そのうち、マギーは雑誌に載っている女王の写真をじっと見つめては、自分と比べるようになった。特に2人とも年を取れば取るほど、比べずにはいられなかった。ふつう、双子でもない限り、自分と比べてみるようなそっくりさんがある人なんて、そうはいないはず。なのに、マギーと女王は同じ顔、まったく同じ顔なので、チャーリーは言う。

「いいかい、2人が並んだとしてだな、彼女にお前の服を着せ、お前に彼女の服を着せたとしてもだ、違いが分かる奴なんてイングランド中どこを探してもいねえよ」

そんなふうにはチャーリーはずごく興奮することがある。まるで宝の地図を持っていながら、宝まで辿り着けないかのように。女王は姿勢が悪い。マギーのほうがまし。女王は肌がきれい、マギーよりも（女王は高価な保湿液をいろいろ使っているのだから当然だろうが）。もし女王の目をまじまじと覗き込むチャンスがあったら、彼女もマギーみたいに内気だと気づくはず。女王の健康状態もマギーより良好。マギーはひどい喘息持ちで、動揺したり緊張したりすると息がゼイゼイ。また、腸に炎症があり、最近では毎

日長時間トイレで過ごしては、中でぶつぶつ言ったり悪態をついたりしていたが、これは彼女の特権。汚い言葉も言いたい放題。しかし、そういうプライベートなこととなると、マギーは女王についてあまり知らなかった。女王のお気に入りの犬や馬や城なら、エドナがいつもペラペラ喋っているから知っているけれど、もっと個人的なことについては何ひとつ知らなかった。女王が自分の目鼻立ちに満足しているのか、自分のことを魅力的と思っているのか、美しいと思っているのか、人並みだと思っているのか——マギーには分からない。女王は鏡を覗き込んで十分満足なのか、わざわざ自分の外見などに気を揉んだりしないのか、女王なのだからそんなこと気にする必要がないのか？ マギーは女王ではないから気になるというのに。

マギーは内気な性格で、かなり遠慮がちだったので、エドナに言わせれば、グラスゴーよりもエジンバラの女性に近かった。人を押しつけて前に出ようとするタイプではないので、後ろの座席に座って人生過ごせれば、それで申し分なく幸せだっただろう。でも、その顔のせいで、前の席に座る羽目に。おかげで、起きた瞬間から床に就くまで、じろじろ見られる毎日。髪型を変えようとしても、結果はいつも同じ。ちりちりパーマを頼んでも、終わってみると、あの忌々しい女王の髪型。

「伸ばしてるんですよ」

そう言っても、切られてしまう。毎年毎年、どの美容師もマギーの頭をあのばかけた髪型にしたい誘惑には勝てず、仕上げはすべすべつやつやの変てこウェーブ。マギーにだって、たくさんの図書館や病院や劇場のオープンに立ちあい、たくさんのテープカットをすることができたであろうに。スコットランドをあちこちまわっては、神妙に頷いたり思慮深そうに一言二言述べたりして、それから力強く握手をしながら人々を押しつけていくことだってできたであろうに。

エドナとマギーがビンゴをしに出かけた時のこと、エドナはみんながマギーを見つめているのを楽しんでいた。まるで自分がマギーを作り出したとでも言いたげに。あるいは、マギーがサーカスの出し物かフリークショーの見世物であるかのように。人々がマギーを見るのを眺めていたエドナは、読み上げられる数字にあまり集中していなかった。

「ビンゴ！」

マギーが大声で言うと、

「あんたはもう十分金持ちだろう」

と誰かが大声で言い、彼女の座っていた列にどっと笑いが起きた。それ以来、マギーはいくら誘われても、2度とビンゴには出掛けなかった。

「もうあんな目に遭うつもりはないわ」

とマギーは言い、エドナをひどくがっかりさせた。マギーと出かけると、一波乱、一騒動あって面白かったのに。

マギーが行動を起こすべき日がやってきた。人生の他の物事にはもっともな理由があるのに対し、自分が女王とそっくりな顔をしているのにはもっともな理由などないのだと、やっと彼女にも分かってきた。この顔にはどういう意味や目的があるのか見届けようと、マギーは今まで何十年も辛抱強く耐えてきた。いつだってどこか物事を達観していたので、チャーリーが会社で昇進できないと、

「自分に見合ったものって、なかなかやって来ないものなのよ」

と元気づけようとした。マギーはどんなに些細な出来事でも、その背後には何らかの意図が存在するものだと思っているタイプだった。彼女にとって偶発的とか偶然の一致というのはあり得ず、物事は必ず何らかの理由があって起こるもの。だからこそ、鏡の中に自分と女王を同時に見ながら、何十年も自分の顔に耐えてきたのだった。でも、もうすぐそれも終わり。自分は物言わぬマグカップではないし、自己主張する時が来た。彼女には長年貯めてきたヘソクリがあり、全部で3,500ポンドあった。そのお金で、チャーリーとクルージングの旅に出るか、それともこれからしようと思っていることをするかは、もともと五分五分だった。しかし、クルージングは、港に着くたびに人々がキャーキャー騒いで、悪夢のような旅になるだろう。だから、はい決まり。自分のために使うことにしたのだ。

その朝、マギーは7時に起きた。鞆はもう前の夜に用意済み。2週間ほど妹のところ泊まってくるとチャーリーには言っている。それだけの時間があれば傷跡も消え、万事うまく行くだろう。できるだけ家から遠いほうがいいので、これからロンドンで手術を受ける。南に向かう電車に乗っているうちに、スコットランドからイングランドへと移ったが、彼女にはその違いがあまりよく分からなかった。

これから手術をしてくれる人物に会うために、実は数ヶ月前に彼女は上京した。その時、すでに要望は伝えた——もっと長い鼻、もっと高い頬骨、今とは違う顎。しかし、そんなにいっぺんに直すとすると、相当な手術になるだろうし、彼女の歳を考えると顔にもよくないだろうと医者と言った。そこで話し合った結果、鼻だけを手術することに。鼻だけならそれほどお金もかからないし、ちゃんと顔全体の感じも変わるだろうから。

もちろん、そんな大きな決断をする時には誰も怖じ気づくもので、ウエストエンドに向かうタクシーの中でマギーは考え直していた。私は今までずっと少し怒りっぽかったんじゃないだろうか。陽気に笑うのが好きな人だったら、女王の顔をしていても楽しく生きてきたんじゃないだろうか。私は何でも自分の顔のせいにして、自分の欠点をごまかしてきたんじゃないだろうか。もし女王と同じ顔じゃなかったとしたら、違った人生になってたのだろうか。でも、どんなふうにも？ 別に今だって女王のお金とか宮殿とかを持っているわけじゃないし、今まで何か得をしたことがあるわけじゃない。そもそも、本当に私、今まで苦しんできたのだろうか。チャーリーが私を愛してくれるのは、私が私であって、しかも女王にそっくりだから。でも、世の夫という夫はみんな自分の妻に妙な期待をするみたいだし。自分の妻を妻であると同時に娼婦とみなしたがる夫だっているんだから、それを思えば、少なくともうちのチャーリーはそこまでひどい奴じゃない。それに、暴力をふるったことなんかないし、今までほんの1度だって乱暴な口をきいたこともないし、私を彼の女王様として扱ってくれた。そうだ、男運に恵まれていない女の人だったら、きっと何が何でもうちのチャーリーを欲しがらんんじゃないだろうか。私が今とは違う鼻で家に帰ったら、チャーリーは何て言うだろうか？ ぎょっとするだろう。ひどく腹を立てるだろう。

「マギー、なんでまた俺に一言相談してくれなかったんだ？ おまえ、一体何考えてんだ？」

と言うだろう。それに、たぶん泣く。そうよ、ああ、何てことかしら。チャーリーは今まで2回泣いたことがあった——父親が死んだ時と、74年にスコットランドが負けた時。2回とも、マギーは憐れみと嫌悪感が入り混じった気持ちでいっぱいになった。彼女と違って、チャーリーは目を押さえもせず、滝のように涙を流した。騒々しく胸を波打たせ、少年の頃以来泣くチャンスのない男のように大声で泣き叫んでいた。

「ああ、なんてこった！ ああ、なんてこった！」

今、マギーの気が変わったのは、チャーリーが泣くだろうと考えてのことだった。まあ、仕方がない。女王の顔をして、それに耐えていこう。黒タクシーがピカデリーサーカスを過ぎる時、マギーが窓の外を見ると、人々が興奮して中を覗きこんでいた。その人たちに向かって彼女はほんのちよっとだけ手を振った。

Jackie Kay, "Not the Queen"

## < 書 評 >

イギリスにおいて今年2002年は女王エリザベス2世の即位50周年、いわゆるGolden Jubileeである。jubileeとは「(25年・50年・60年・75年などの)記念祭、祝祭、祝典」や「歓喜」を意味する。イギリスでは今年6月の3日・4日を特別祝日とし、1日・2日の週末からあわせて4日間、ロンドンをはじめ各地で記念式典や祝賀行事が催され、イギリス全土が祝賀ムードに包まれた。その他にも、5月から8月にかけてさまざまな祝賀行事が開催され、エリザベス女王は各地を訪問した。

即位50周年を祝うのは、歴代国王の中で2人目である。1人目は、大英帝国が繁栄を極めた時代のヴィクトリア女王(在位1837-1901)である。18歳で即位し81歳で亡くなるまで、歴代国王の中で最長の64年間に渡って玉座を暖めたヴィクトリア女王に対し、今年即位50周年を迎えたエリザベス2世は現在76歳。ある新聞の調査によると、女王は以前「まだまだ国民のみなさんに奉仕するために、当分は退位しません」と宣言し国民の過半数を落胆させたというが、Golden Jubilee 効果なのか、現在では国民の約6割が女王に

はまだまだ頑張ってもらいたいと思っているようである。

高齢の女王は早くチャールズ皇太子に王冠を譲るべきだという声、切手や紙幣や硬貨にチャールズの顔が付いているのは嫌だからまだ女王に頑張ってもらいたいという声、チャールズの長男ウィリアム王子が国王になればいいという声など、国民の反応はさまざまであるが、国民のほとんどが王室を支持していたのは、今や昔の話。今日では王制そのものの存続を問う声も上がっており、ブレア首相のブレインも務めたマーク・レナードは「王位継承は国民投票で過半数の支持が必要」という大胆な提案をした。実際、王室批判の高まる中、100年後に王室はなくなっているだろうと考える人も少なからずいるようで、王室の存続のためには王室そのものが自ら大きく変わらなければならないと言われている。

昔から「統治ではなく奉仕」を掲げてきたエリザベス2世は、1997年、自らの金婚式のスピーチで「王室は一般大衆にもっともっと近づくべきだ」と語った。実際、女王は普段から各種の行事に参加したり施設を訪問したりとイギリス各地を精力的に動き回り、一般大衆に溶け込もうと腐心している

ように思われる。

しかし所詮、女王は女王。王室所有のヨット「ブリタニア号」を経費節減のために手放そうと、国民と同じように税金を払うようになると、そして、どれだけ国民と触れ合う機会を増やそうと、女王と国民の間には、当然のことながら、高い壁がある。あるいは、深い溝といってもよい。どれだけ頑張ったところで、女王はその壁を越えることはできない。

その壁の反対側、つまり一般大衆の側にいるのが、今回取り上げた作品「女王ではなく」の主人公マギー（マーガレット・ドロシー・ロックハート）である。しかし、一般大衆の一員であるにもかかわらず、彼女は周囲に溶け込めない。浮いてしまう。女王と同じ顔をしているがゆえに。

作者がエリザベス女王と瓜二つの女性を物語の主人公にしたのは、冒頭の〈序〉で触れたように、今年が **Golden Jubilee** であるからではないだろうか。つまり、今年は平生以上に世間の注目が女王に集まることを予測した上での、まさに時宜を得た出版だったのではないだろうか。機を見るに敏とも言えるかもしれない。

この短篇小説が掲載されている *New Writing 11* は、すでに〈序〉で紹介したように、イギリスで毎年出版されている最新文学アンソロジー *New Writing* の2002年版であるが、その上梓は今年4月であった。つまり、6月の記念式典に向けてイギリス全土で祝賀ムードが高まりつつある中で、この作品は世に送り出されたのである。絶妙なタイミングである。もちろん、この「女王ではなく」という作品が収録されているのがいまが、*New Writing 11* はおそらく同じ時期に出版されていたであろう。したがって、タイミングの絶妙さというのは期せずしての結果にすぎないだろう。

しかし、作者ジャッキー・ケイが「女王ではなく」という作品を他の年ではなく2002年に発表したのには、やはり意図があるように思われる。あくまでも憶測の域を出ないが、作者の創作の海図には、〈Golden Jubileeの年に女王関係の作品を発表する〉という計画があったのではないだろうか。

また、*New Writing 11* の編者・出版社の立場から考えてみると、少々乱暴な見方かもしれないが、あくまでも **Golden Jubilee** の年だからこそ「女王ではなく」を掲載したのであって、他の年であれば掲載しなかったかもしれない。

どちらにせよ、結果的に作者と編者と出版社は2002年に「女王ではなく」という作品を世に問うことになったわけである。では、その内容について考察してみたい。

スコットランド南西部の港市グラスゴーに住むマギーは、エリザベス女王に顔がそっくりなだけでなく、年齢までも同じである。特に10代の頃から70代になった現在まで、誰もが彼女を女王と比べる。当然であろう、国で一番有名な人物にそっくりなのだから。皆がジロジロ見る、ヒソヒソ話をす

る、不寐に話し掛けてくる、からかう、後をつけてくる——といった具合に、マギーは悪夢のような人生を送り、自分の「その顔」を「重荷」に感じている。

ちなみに、マギー（＝マーガレット）という名前は、英国憲政史上初めての女性首相で「鉄の女」とも呼ばれたマーガレット・サッチャー元首相の名前と同一。つまり、この物語の主人公は、顔は現君主の女王と同じで、名前は元首相と同じという、輝かしくも重い運命を背負っていると言えよう。

名前についてはさておき、マギーは女王にそっくりという自分の運命を嘆いており、決して幸運だとは思っていない。その顔のせいで自分の「人生が台無し」になったと思っている。したがって、女王に対して敬意や好意を抱くどころか、自分の不幸の元凶ともいえる女王に批判的であり、悪意や恨みすら抱いているようである。

また、女王に対して批判的な態度をとるのは、主人公だけではない。彼女の友人エドナや他の登場人物も随所で女王を批判したり揶揄したりする。したがって、**Golden Jubilee** という現実世界の祝賀ムードとは対照的に、この物語の基調は女王に対する批判・揶揄であり、物語全体にネガティブな空気が流れている。これでは、**Golden Jubilee** に「花」を添えるというよりも「毒花」を添えるようなものである。

本来、小説の読者は物語の世界と現実の世界を——虚構と現実を——切り離して考えるべきかもしれないが、この作品に限って言えば、読者が物語を読みながら現実を強く意識するように作者自身が仕掛けているように思われる。その仕掛けとは、事実の借用である。つまり、作者は現実界における事実を物語の中にいくつも挿入することで、読者（特にエリザベス女王のことをよく知っている読者）の注意を惹いているのである。たとえば、女王の顔や髪型や服装の描写、女王の年齢、女王の毎年恒例のクリスマス演説、女王のウェルシュ・コーギー好き、故・ダイアナ元皇太子妃との不和など、イギリス国民であれば、「うん、そうそう」と思わず頷きそうな女王ネタが物語の随所に散りばめられている。このように、作者は現実を——現実のエリザベス女王を——利用しながら物語を作っているのである。

では、物語という虚構の世界では何でも自由に創造できる神のごとき存在であるはずの作者が、何のためにわざわざ現実を取り入れているのか？

エリザベス女王を槍玉に挙げたからだろうか。つまり、作者は登場人物たち（特に主人公）を使って女王を茶化し、また批判したかったのだろうか。確かに、登場人物たちに自分の考えや信条を代弁させる作家がいるのも事実であるし、また、たとえ国の君主である女王でも、ユーモア好きなイギリス人にかかれば、たちまち風刺的になるのもまた事実である。いやむしろ、誰もが知っている女王だからこそ、

みんながこぞって揶揄したり批判したりするきらいがあり、その点、天皇や皇室に対する日本人の遠慮がちな態度とはかなり異なる。作者ジャッキー・ケイは「女王ではなく」という作品を発表することによって、世の祝賀ムードに水をさしたかったのかもしれない。

また、別の見方をするならば、エリザベス女王という実在の人物を引き合いに出すことによって、自分の想像が生み出したマギーという主人公に現実味を加える——主人公を生身の人間らしくする——という効果を作者は狙ったのかもしれない。虚構の世界を本物らしく見せるために実在する人名や地名を使うというのはよくあることである。

また、有名人と瓜二つの人の話というのも、実話であれ小説であれ映画であれ、必ずしも珍しくはない。大統領や独裁者のそっくりさんが巻き込まれる悲喜劇もあれば、現実世界の例では、あのマイケル・ジャクソンが実は自分のそっくりさんを雇い、しばしばメディアの目をうまくごまかしていたというニュースが世間を驚かせたこともある。とにかく有名人のそっくりさんというのは、やたらと目立つ。世間の関心を惹き、好奇心をくすぐる。したがって、「女王ではなく」の作者が主人公をイギリスで一番有名な人物のそっくりさんに設定することで世の読者の注意を惹こうとしたのだとすると、その策略は安易と言わねばなるまい。

さて、マイケル・ジャクソンにそっくりな男性の場合は、自らそっくりになろうと努め、ついにはそれが運よく仕事にまで結びついたという例であるが、「女王ではなく」の主人公マギーの場合はちがう。俗に「この世には自分にそっくりな人が3人いる」と言うが、たまたま有名人にそっくりな人間というのものだ。たまたま(=作者の都合上)、マギーもその1人。

善良で生真面目なマギーは、自分が女王と同じ顔をしているという事実を面白がったり、他人を騙して一儲けしようと考えたりすることもできず、ただ「その顔」を呪うばかりの鬱屈した人生を過ごす。マギーは、女王が本物であって自分は偽物=偽者にすぎないという感覚に苛まれる。「自分が自分にとって何者でもないなんて、誰だって耐えられっこないではないか」と物語の語り手がマギーに同情しているように、自分が自分の人生の主役になれないというのは悲劇であろう。すべての物事や出来事の「理由」を解明せずにはいられない性格のマギーは、半世紀以上に渡って自分の顔の「理由」を探し続けるが、それは「理由探し」であると同時に、いわば「自分探し」である。したがって、この作品はよくある「アイデンティティー追求」の物語であると言えよう。

探求・追求には障害や苦難が付き物であるが、それにしてはマギーの人生は余りにも苦悩に満ちている。ほんの短い物語ではあるが、その端々から滲み出ているマギーの鬱積した

不満や呪詛は、寛大で同情的な読者をも暗い気分、あるいはイライラさせるのではないだろうか。

物語終盤、マギーは整形手術によって思い切って現状打破を図る。つまり、顔の「理由」を探すことをついに断念したのである。しかし、この断念は逃避ではない。その顔に「もっともな理由」も何か特別な「意味や目的」もないことにより、マギーは気づき、今までの忍従から行動への劇的な変化を遂げるのである。鼻を「直す」整形手術という決断は、彼女にとって人生をやり「直す」ための第1歩と考えることができるだろう。この1歩は、マギーの人生におけるターニングポイントであり、物語展開上のターニングポイントでもある。

だが、エリザベス女王同様すでに齢70を越えたマギーがこれから整形手術を受けて第2の人生を歩みだすというのは、やはりどこか「今さら」の感を否めず、その決断には悲壮感すら漂うのではないだろうか。

その悲壮感を吹き飛ばすのが、物語の最後の段落である。いざ整形手術を受けるためにロンドンに上京したマギーは、タクシーの中で自分の人生を振り返り、色々と「考え直す」。この段落はほとんどすべて彼女の心理描写であり、内省的なマギーの独壇場であるが、最後に夫のことを考えて整形手術を断念する。この断念は、先の断念——理由探しの断念——よりも偉大である。なぜなら、自分の「顔」を直すよりも、自分の「考え」を直すことのほうが、はるかに困難なはずである。長年貯めてきたヘソクリで顔は簡単に直せるが、考えは直せない。金で顔の手術はできるが、心の手術はできない。「まあ、仕方がない。女王の顔をして、それに耐えていこう」という突然の明るい開き直りは、それまでの半世紀以上に及ぶ忍従からの大きな飛躍であり、奇跡的ですからある。

顔を直すのではなく考えを直すという離れ業を土壇場で演じたマギーの勇姿は、物語の結末——「黒タクシーがピカデリーサーカスを過ぎる時、マギーが窓の外を見ると、人々が興奮して中を覗きこんでいた。その人たちに向かって彼女はほんのちょっとだけ手を振った」という1節——に凝縮されている。顔は以前のままで、マギーはもはや別人である。マギーは顔を整形することなく変身に成功したのだ。物語の上空を重く覆っていた暗雲は消え、明るい光が射し、主人公に感情移入していた読者はカタルシスを味わうはずである。

ところで、整形手術をやめたマギーはヘソクリを何に使うのだろうか？ せっせと貯めた3,500ポンドで何をするのだろうか？ もちろん、今度は迷うことなく「チャーリーとクルージングの旅に出る」だろう。マギーの幸せな変身に一役買ったのは、夫のチャーリーなのだから。そして、マギーは旅先でも人々に向かって「ほんのちょっとだけ手を振った」りするのではないだろうか。(提出期日 2003年3月5日)